

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02489

研究課題名(和文) 近現代英語演劇における兄弟姉妹の表象に関するジェンダー論的研究

研究課題名(英文) Gender Studies on Representations of Siblings in Modern British Drama

研究代表者

岩田 美喜 (Iwata, Miki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：50361051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代から現代に至るイギリス・アイルランドの演劇における家族(特に兄弟姉妹)の描かれ方を分析し、演劇が描出する家族表象と社会の変化の関係を考察するものである。

研究対象とする期間が長い分、扱う劇作家も多くなったが、研究期間を1年延長したこともあって、初期近代から現代までの作家たちの作品論を日本語および英語で継続的に発表し、戯曲の中の家族表象における姉妹の役割が現代に近づくにつれて重要になってきたことを明らかにすることができた。また、総合的な成果を研究期間終了後1-2年以内に単著として出版できる見込みである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果としては、兄弟姉妹の表象というテーマを軸に、かつてない広範な時代に渡ってイギリスおよびアイルランドの戯曲を渉猟し、比較検討を行ったことが挙げられる。具体的には、これまで並べて論じられることなどほとんど考えられなかったシェイクスピアの『十二夜』(1600頃)とキャリル・チャーチルの『トップ・ガールズ』(1982)が、シスターフッドという概念を鍵として相互に再考できる可能性が本研究によって明らかになった。このようにして、本研究はイギリス・アイルランド演劇研究の射程を拡大することに貢献したといえるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at the dynamic relationship of the changes of the idea of the 'family' in drama and society, through the analyses of representations of families (especially those of siblings) in British and Irish drama.

The unusual length of the periods with which this research dealt led to the extraordinary numbers of playwrights to be read, but, partly because I got an extra year for this research, I could publish constantly essays on plays from the early modern era to the present both in English and in Japanese. These individual essays, read as a group, would prove that the role of sisters in plays has been steadily increased its importance as we approach the modern age. I expect to publish this project's comprehensive results as a monograph within 1-2 years after the end of the research period.

研究分野：英米文学

キーワード：イギリス・アイルランド演劇 家族表象 ジェンダー論 女性表象

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景にあるのは、当該研究者が平成 26～28 年度にかけて実施した研究課題「長い 18 世紀の英語演劇における兄弟像の社会・政治的研究」(基盤研究(C)・課題番号 26370266)で得られた成果である。上記の研究においては、イギリス・アイルランド演劇における兄弟の表象を取り上げ、長子が全ての相続財産を得る初期近代～近代のイギリスにおいては、演劇における兄弟表象は敵対的に描かれることが多かったことや、18 世紀中葉に重商主義的な帝国支配が強まるにつれ、長子と弟たちのライバル関係が「宗主国イギリスと植民地」の関係のアレゴリーとして機能するようになってくることなどが立証された。

だが、この研究を遂行するにあたって多様な戯曲の家族表象を検討した当該研究者は、(1) 男兄弟の確執と同時に、初期近代のイングランド演劇には「男女の双子」というモチーフも頻出していること、(2) 時代がくだるにつれて、姉妹(あるいは姉妹の関係にある女性たち)の役割が重要性を増してくるようになると、(3) 特に 20 世紀に入ると、キャリル・チャーチルの『トップ・ガールズ』(1982)など男兄弟の代わりに姉妹の確執を描いた作品が登場することなど、上記の研究ではうまく説明できない事例も数多いことに気がつき、イギリス・アイルランド演劇における家族表象の変遷を考察するにあたっては、女性ジェンダーの観点など新たな視点をもっと積極的に取り入れるべきであるとの結論に至った。特にキャリル・チャーチルの戯曲などは、これまでフェミニズムの視点から論じられることが多く、系譜学的なアプローチは皆無であったが、これまでの当該研究者の研究成果を発展的に継承することで、現代フェミニズム演劇に新たな側面から光をあてることのできるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、一次文献、二次文献、映像および実際の上演等の資料を多面的に取り扱いながら、以下の研究を遂行することを目的とした。

(1) 初期近代から現代におよぶイギリス・アイルランドの英語演劇をできる限り網羅的に収集し、そこに現れる兄弟および姉妹を中心とした家族の表象を整理し、データベース化する。

(2) 収集した戯曲のデータを基盤として、家族とジェンダーという研究テーマを軸に、核となる作品について精読を基盤として個別的な論文を執筆するとともに、全体的な傾向としてイギリス・アイルランド演劇の家族表象にどのような質的变化が生じたかを通時的に分析する。

(3) 上記(2)を遂行するにあたり、社会史や家族史、女性史など他分野の研究成果を積極的に活用し、演劇研究によって得られた知見を学際的な視点から深化、発展させる。

(4) 本研究の成果を、国内外の学会や国際的な学術雑誌等で積極的に発表するとともに、研究期間終了後 1～2 年以内に、総合的な研究成果を単著として公表し、最終的な成果を広く世に問う。

3. 研究の方法

本研究は、方法論としてテキスト分析を重視した。そのため本研究の成果は、上記「研究の目的」の(1)で言及した研究対象となる戯曲のデータベースから、重要なものと当該研究者が判断した作品の精読に基づく各論的な論文の数々を核としている。

ただし、本研究は演劇というジャンルが小説などと違って上演を想定した必然的に共同体的な芸術であることにも注意を払い、必要に応じて上演史・受容史の問題を扱いながら、ある特定のテキストにおける家族表象が、実際の上演においては時代によってどのように変化していくのかなどについても考察を重ねた。

また、これらの各論的な成果発表が断片的なものとして終わってしまわないように、研究期間終了後 1～2 年以内を目処に、総合的な成果発表として単著の執筆・出版を進めている。

4. 研究成果

本研究の大きな研究成果としては、当該研究者がこれまで積み上げてきた「演劇における兄弟表象の系譜学」の成果を発展的に継承することで、イギリス・アイルランド演劇における姉妹表象(ときに敷衍して女性表象)に、時代を限った個別的なジェンダー研究の枠組みを超えた幅広い射程を与えた点であると考えられる。以下、具体的な研究成果を引きながら、イギリス・アイルランド演劇における姉妹表象の系譜学を緩やかに時代別に概説する。

(1)【初期近代における「男女の双子」のモチーフ】初期近代演劇においては、兄弟姉妹の表象としてもっとも目立つのは家父長としての権威と財産相続権を巡る兄と弟の敵対関係ではあるが、それに混じって男女の双子を中心とする芝居も散見される(具体的には、シェイクスピア『十二夜』(1600 頃)、ジョン・ウェブスター『モルフィ公爵夫人』(1614 頃)、ジョン・フォード『あわれ彼女は娼婦』(1633)など)。男兄弟の敵対関係というモチーフは、構造的に異性愛を組み込んだ家父長制社会における必然的な男性間の軋轢を反映したものと考えられるが、「男女の双子」

はそこにオルタナティブな視点を加えるはたらきを持っているものと考えられる。だが、「男女の双子」が意味するものは、それが登場する作品が喜劇なのか悲劇なのか、また作者がどのような個性を持ち、どのような時代背景の中で執筆した劇作家なのかといった多様な要素からさまざまに変容し得る。本研究の成果のうち、『Brothers Lost, Sisters Found: The verbal **Construction of Sisterhood in Twelfth Night** (2019)』では、喜劇『十二夜』において、男女の双子の取り違えによって巻き起こるロマンティック・コメディが2組の結婚という家父長社会順応的な結末へと収斂していく中で、**Viola** と **Olivia** という二人の女性キャラクターが密やかなシスターフッドを育んでいる可能性を論じた。その一方、『『あわれ彼女は娼婦』に見る「男女の双子」という幻想の終わり』(2019)では、男女の双子の近親相姦を扱ったこの悲劇が、双子の妹を自分の所有物としてしか考えない主人公の閉塞したメンタリティが、当時の最新の医学的発見である「血液循環説」と結びつけて表象されているさまを明らかにした。

(2)【近代における伝統的な兄弟表象の脱構築】いわゆる 長い18世紀の時代に入ると、「男女の双子」というモチーフは姿を消し、代わりに伝統的な兄弟表象にひねりを加えた男兄弟や男女の兄妹の姿が目立つようになる。これらは、イギリス社会がゆるやかに土地経済からプロト資本主義経済に移行するに従い、長子相続制度に基づいた敵対関係を描くことがもはや大きな説得力を持たなくなったという時代背景と関係していると考えられると同時に、女性登場人物が劇中の家族の中で一定の主體的な役割を持つようになってきていることを示すものと思われる。この点に関する代表的な本研究の成果を上げれば、**R. B. シェリダンの『悪口学校』(1777)**に登場するサーフィス兄弟がいかに過渡期的な曖昧な描かれ方をしているかをつまびらかにした「一八世紀における作法と感傷主義」(2022)と、オリヴァー・ゴールドスミスの『負けるが勝ち』(1773)に登場する兄妹であるトニー・ランプキンとケイトがそれぞれ喜劇としての物語展開の鍵となる重要性を持っていることを論じた『Tony Lumpkin in and out of Sweet Auburn: The Literary Topography of Oliver Goldsmith's *She Stoops to Conquer* (2020)』が挙げられる。

(3)【現代における姉妹表象の重要性】現代のイギリス・アイルランド演劇においては、19世紀末からの連続的な女性運動の流れと連動して、これまでになく 姉妹 の表象の重要性が高まり続けている。特に、イギリスでフェミニズム演劇が大きく花開いた1980年代においては、シェイクスピアのような古典作品を受容していく上でも同様の視点が重視されており、例えば**WTG (Women's Theatre Group)**による『リア王』の改作『リアの娘たち』(1987)では、『リア王』の三姉妹の関係を娘たちの視点から捉え直している。また、姉妹 とシスターフッドの問題は、現代イギリス演劇を代表する劇作家キャリル・チャーチルの諸作品 『クラウド・ナイン』(1979)、『トップ・ガールズ』(1982)、『スクライカー』(1994) においては非常に重要なものとなっている。これら現代フェミニズム演劇の批評的受容は、これまでのところ現代演劇という枠組みでのみ成されているが、本研究によりより広範な射程を持った系譜学的な視点から位置付け直すことが可能である。単年度の研究成果においては、現代演劇に関する成果は『**W. B. イェイツ『窓ガラスの言葉』に書かれた読めないメッセージ』(2020)**など、まだ限られた本数にとどまっているが、現代演劇に関する研究は着実に進んでおり、総合的な成果として研究期間終了後1~2年以内に発表予定の単著で十全に論じられる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Iwata, Miki	4. 巻 -
2. 論文標題 "Tony Lumpkin in and out of Sweet Auburn: The Literary Topography of Oliver Goldsmith's She Stoops to Conquer"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 British Literature in the British Context and Beyond: New Perspectives from Kyoto	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 岩田美喜	4. 巻 -
2. 論文標題 「W. B. イェイツ『窓ガラスの言葉』に書かれた読めないメッセージ」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『幻想と怪奇の英文学IV』	6. 最初と最後の頁 253-271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwata, Miki	4. 巻 -
2. 論文標題 "Johnson and Garrick on Hamlet"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Johnson in Japan	6. 最初と最後の頁 88-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 岩田美喜	4. 巻 7
2. 論文標題 「トマス・ミドルトンの初期諷刺喜劇における女性表象」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Shakespeare Journal	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwata, Miki	4. 巻 57
2. 論文標題 "Brothers Lost, Sisters Found: The Verbal Construction of Sisterhood in Twelfth Night"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Shakespeare Studies	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田美喜	4. 巻 78
2. 論文標題 「「ぼくは郵便局にいた」ーW. B. イエイツの戯曲に見る復活祭蜂起の表象」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『英米文學』	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwata, Miki	4. 巻 -
2. 論文標題 "Topophilia In Tohoku"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Peter Robinson: A Portrait of His Work (ed. Tom Phillips)	6. 最初と最後の頁 192-209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 岩田美喜	4. 巻 -
2. 論文標題 「ハムレットを演じる若者たちのダブリンー第九挿話「スキュレとカリュブディス」におけるスティーヴンの即興演技」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『百年目のユリシーズ』(下楠昌哉編)	6. 最初と最後の頁 179-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田美喜	4. 巻 -
2. 論文標題 「一八世紀における 作法 と鑑賞主義」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『コメディ・オヴ・マナーズの系譜』	6. 最初と最後の頁 98-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 岩田美喜
2. 発表標題 「若きトマス・ミドルトンの女性表象」
3. 学会等名 第58回 日本シェイクスピア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩田美喜
2. 発表標題 「「目に見える自分の姿を保てんのだ」――『マクベス』と『アントニーとクレオパトラ』に見る英雄の見世物化」
3. 学会等名 九州シェイクスピア研究会 第189回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩田美喜
2. 発表標題 「『あわれ彼女は娼婦』に見る 男女の双子 という幻想の終わり」
3. 学会等名 第57回 シェイクスピア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩田美喜
2. 発表標題 「『悪口学校』における マナーズ と感傷主義」
3. 学会等名 第89回日本英文学会（静岡大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Iwata, Miki
2. 発表標題 'Childlessness and Grief in Justin Kurzel's Macbeth (2015)'
3. 学会等名 Interdisciplinary Shakespeare Beyond Theory (Chungbuk National University, Korea) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田美喜
2. 発表標題 「イエイツの韻文劇と1930年代の前衛演劇運動」
3. 学会等名 日本イエイツ協会第53回大会（中央大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩田美喜
2. 発表標題 「年寄りが怒ったっていいじゃないか」ーW. B. イエイツと 怒れる老人 としての詩人の自己成型」
3. 学会等名 日本英文学会第93回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岩田美喜、松本朗、秦邦生、木下誠（共編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 408ページ
3. 書名 『イギリス文学と映画』	

1. 著者名 岩田美喜、植月恵一郎、青木愛美、岩永弘人、吉中孝志、本多まりえ、丹羽佐紀、佐野弘子、中山理、富樫剛、竹山友子、川田潤、大久保友博、西川健成	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 283 (113-134)
3. 書名 『十七世紀英文学における生と死』（十七世紀英文学研究シリーズ）、「『あわれ彼女は娼婦』に見る男女の双子」という幻想の終わり（岩田美喜）」	

1. 著者名 IKEDA Hiroko, YOKOUCHI Kazuo, IWATA Miki, MIZUNO Mari, Mizuo Naoyuki, KAKIHARA Taeko, NAKAMURA Hitomi, NISHITANI Mariko, Peter Robinson, Luca Crispi, and Celia de Freine	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 238 (31-49)
3. 書名 Irish Literature in the British Context and Beyond: New Perspective from Kyoto, "Tony Lumpkin in and out of Sweet Auburn: The Literary Topography of Oliver Goldsmith's She Stoops to Conquer (IWATA Miki)"	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------